

THE 34<sup>TH</sup> ANNIVERSARY OF HIJIKATA TATSUMI'S DEATH: TALKING TOGETHER ABOUT HIJIKATA TATSUMI

2020年1月21日(火)

17:00 (開場 16:30) – 20:30

慶應義塾大学 (三田) 東館 6F G-Sec Lab

[参加無料・入退場自由]

ゲスト講師 | 佐藤信 (演出家)

ライブ演奏 | のなか悟空 (音楽家)

恒例の「土方巽を語ること」を開催します。昨年は特例で「土方巽を語ること」からスピンオフして「公開討議・土方巽アーカイヴ」として、土方巽アーカイヴを取り巻くアーカイヴをめぐって討議するカンファレンスの会となりました。2020年は今一度、土方巽をめぐって話し合う集まりとして開催します。2019年もまた、世界での舞踏への関心の高まりに応じて、土方巽アーカイヴに国内外から多くの来訪者がありました。また、舞踏関連のフェスティバルやイベントが世界各地で開催されました。

当日は、2019年のトピックを紹介しつつ、土方巽をめぐって、舞踏をめぐって、さまざまに語り合います。

没後三十四年

土方巽

を語ることIX

「語ること」はいつものように出入自由のイベントで、参加者には、整理も論理も不要、紆余曲折あり自由奔放、闊達な発言を期待します。アーカイヴからは、2019年の土方巽をめぐる3題話としては、新しいところから、ロサンゼルスでの「土方巽展」その反響、New York Butoh Institute Festival開催とVangelinaによる”Hijikata Non Amour”、そして映画「JOKER」でのホアキン・フェニックスのダンスシーンでしょうか。これでは、アメリカに偏しているので、加えて、私も参加したオスロでの「International Butoh Dance Conference」を紹介し、チョイ・カフアイの「Unbearable Darkness」の各地での本公演、さらに土方巽の舞踏譜の解釈に挑んだ「きょうかくうしお（森山未来&辻本知彦）」のダンス公演「素

晴らしい偶然をちらして」についても言及しておきたいところ。こうしてみると、世界各地で、土方巽の舞踏をベースにしつつ、新しい舞踏、もう一つの舞踏を創造する時代に入っていることがわかります。もちろん、「鎌鼬の里芸術祭 2019」にも触れさせていただきます。鎌鼬では、たえず土方巽の原点を求めて活動を充実させています。さらに、2020年に向けての土方巽アーカイヴの活動もみておきます。新しい年における舞踏がどう展開するのか、舞踏の原点を見失わず、新しい舞踏にどう接続するのか、日本から世界へ、世界から日本へと往還しながら展望します。（森下）

\*

ゲスト講師には佐藤信さんを迎えます。佐藤信さんはご存知のように、1960年代から日本の演劇界の先頭を走り続けてこられた演出家です。佐藤さんは、最初期の土方巽のダンスをご覧になり、土方巽に触発されてダンスの活動を開始されました。その後の演劇活動とともに、土方巽をめぐる貴重なお話がうかがえることでしょう。佐藤信さんのお話と意見交換は、19:00から1時間を予定しています。そして、ライブ演奏のゲストとして、フリージャズのドラマー、のなか悟空さんを迎えます。鎌鼬の里芸術祭には騒乱武士を率いて参加され、鎌鼬の里に爆音を響かせました。副島輝人さんが絶賛した野蛮ギャルドの演奏を、鎌鼬の里での記録映像（撮影：末次安里）とあわせて堪能していただきます。



#### 佐藤信（さとう・まこと）

演出家、劇作家。現在、座・高円寺芸術監督、若葉町ウォーフ代表理事  
1943年東京生まれ。俳優養成所を修了後、1966年に自由劇場を設立、1968年に演劇センター68（劇団黒テント）の設立に参画。1970年から20年間、テント劇場の中心的な劇作家および演出家として、日本全国で上演活動を展開。戦後の日本演劇の変革とエネルギーの結集軸となった小劇場運動の先駆的役割を担った。  
主な戯曲に『喜劇昭和の世界 三部作』、『阿部定の犬』、『ブランキ殺し・上海の春』、『あたしのビートルズ』、『鼠小僧次郎吉』、『翼を燃やす天使たちの舞踏』など。演出家としては、自作のほか海外の劇作品はもとより、オペラ、能、人形芝居、現代舞踊など多彩なジャンルでの演出で成果を挙げる。近作には『絶対飛行機』『亡国のダンサー』がある。  
また、劇場の開設と運営にも尽力し、銀座博品館劇場、スパイラルホール、オーチャードホール、世田谷パブリックシアター、座・高円寺のほか、地方のいくつもの公共ホールに関与、民間と公共の双方の劇場のプロデューサーや芸術監督を歴任して、演劇活動で幅広い実践を行ってきた。

さらには、アジア地域の演劇人との交流や創造活動を意欲的に推進し、近年は、横浜・黄金町近くに舞台・スタジオ・宿泊施設をもつアートセンター、若葉町ウォーフを設立し、「人が集まる、人が出会う、人がつながる」拠点として、新たな芸術交流・国際交流の場をオーガナイズしている。2019年の福岡アジア文化賞 芸術・文化賞を受賞。



撮影：小杉朋子

#### のなか悟空（ごくう）

ジャズドラマー、作曲家。フリージャズのさまざまなスタイルのユニット「のなか悟空&人間国宝」、「人間兇器」、「蓮根魂」、「騒乱武士」のリーダー。  
1951年大分県生まれ。1970年代に上京し、キャバレーでの伴奏や自衛隊音楽隊での活動を経て、フリージャズ一筋、「野蛮ギャルド」を自称し、今なお邁進中。80年代には「辻説法」として公園や街角で演奏し日本全国を縦断、さらには富士山頂、チベット高原、キリマンジャロ山脈、ソマリア、アマゾンなどにドラムセットをかついで出かけ、その破天荒のエネルギーをもって演奏活動を行ってきた超人ドラマー。独学による作曲はすでに1400曲を超え、1500曲を目指している。フリージャズ本来のセッションを生む巧みな曲構成

に、日本人の心情を揺さぶるメロウな曲調がかぶる悟空節があふれる楽曲である。  
鎌鼬の里芸術祭に騒乱武士を率いて2年続けて参加し、2018年のライブは「騒乱武士 鎌鼬の里爆音ライブ」としてCDがリリースされている。レコードやCDには、のなか悟空&人間国宝「OVER DRIVE」「JOLLY」、人間兇器「元祖・人間兇器」、蓮根魂「月蝕の夜」など多数。  
キレのいいアップテンポの文体で綴られるエッセイも人気。著書に、『アフリカ音楽探検記』、『マニラどつかれ路地裏紀行』、『フィリピン激憤ひとり旅』、『アマゾン音楽漂流記』、『パチ当たりーシルクロード1万4000キロの大地を叩く』など。

## The 34th Anniversary of Hijikata Tatsumi's Death: Talking Together about Hijikata Tatsumi Seeking the Origin of Hijikata's Butoh

21 January 2020  
5:00pm — 8:30pm

Guest Speaker: Makoto SATOH  
Admission free, come and go anytime

Keio University(Mita), East Research  
Building 6F G-Sec Lab  
2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo

[Access] JR line Tamachi sta. /  
Subway Mita sta. Akabane sta.

[Information] Hijikata Tatsumi Archive  
Tel:03-5427-1621  
Email:moris@art-c.keio.ac.jp

没後三十四年  
土方巽  
を語ること

主催 | 慶應義塾大学アート・センター  
企画 | 慶應義塾大学アート・センター 土方巽アーカイヴ  
協力 | 土方巽アスベスト館、NPO 法人舞踏創造資源

お問い合わせ  
慶應義塾大学アート・センター [担当：森下]  
tel. 03-5427-1621 moris@art-c.keio.ac.jp